

【研修報告】

神奈川県社会科部会歴史分科会・大阪大 学歴史教育研究会による高大連携の試み 「東アジア・東南アジア世界をどう教え るか」実施報告

大船高校 早川 英昭

一、はじめに

近年盛んとなった「高大連携」は、教科・科目の内容についての共同研究・研鑽にまで及ぶようになった。昨年度まで四年間実施された大阪大学文学部のCOE企画「全国高等学校歴史教育研究会」もその一つであった。これは高校の歴史教員を対象に、大学での最新の研究成果を高校現場にどう生かすかをテーマとする公開講座であった。この講座には第一回から世界史研究推進委員会を中心に神奈川の教員も多数参加し、後には企画の一部にも加わるようになったが、残念ながら昨年度でCOEとしての講座は終了した。大変刺激を受けたこのような高大連携の事業を何とか継続できないかとの思いから、今回は神奈川の場合に大阪大学歴史教育研究会から出向いてもらい、他県の高校にも呼びかける企画を歴史分科会として立てた。こうして、八月一日・二日の二日間、栄光学園を会場にして「東アジア・東南アジアをどう教えるか」をテーマにした公開講座を開くことが出来た。

形式は、まず高校生に高校・大学の教員が模擬授業をし、その後授業についてと、歴史教育についての討論をおこなうものであった。

受講した生徒は、外短附属を中心に栄光、柏陽、上郷、港南台、大船、氷取沢など約五〇名で、また教員は、県内・近隣都県のほか関西からも参加があり、これも約五〇名を数えた。

まず一日目の午前中は、「海から見た東アジア世界」を共通テーマとする模擬授業がおこなわれた。最初は外短附属高校の石橋功先生が、「海から見た東アジア世界を学ぶために」と題して、東アジア・東南アジアの地図と、この地で産出する古代から近世にかけての「世界商品」の確認をおこなった。毛皮、人参、金・銀、絹織物、陶磁器、沈香、ナツメグ、クローブ、シナモン、胡椒、白檀、綿織物などはどこで生産されたのか。そしてそれらの産物に憧れたヨーロッパ人が、どうアジアにかかわったのか。ポルトガル、オランダ、イギリスの覇権交代とからめて、「モノ」を中心にすえた授業であった。

続いて大阪大学の桃木至朗先生が「海から見た東アジア世界の歴史」と題して、東アジア、東南アジア海域世界の貿易や交流・抗争の歴史、そしてそれらが各国の歴史に与えた影響などを時代ごとに整理して話された。その一例として、漢から西晋頃までの東アジア海域世界の貿易・交流を次のように整理して提示した。

①紀元前後からモンソンを利用した帆船航海の技術が発達し、大秦王安敦の使者と名乗る者が海路で後漢を訪れたようにユーラシアの東西を結ぶ「海の道」が成立した。
②そこで東南アジアでは海上交易ルートに沿って港市国家が成立し、それらの盟主として扶南や林邑などが栄えた。

③前漢が南越を滅ぼして中部ベトナムまで進出したように、中国王朝もそれ以前から海上貿易に関心を持っており、華南の広州など

の港市が発達した。

④ 一方後漢から三国時代にかけて朝鮮半島・日本列島の海上交流も活発化し、「倭人」や「倭国」が中国と交流を持つようになった。

⑤ 中国王朝は外国の使者を朝貢使節として扱い、朝貢国の支配者に称号を与える(冊封)など華夷思想に基づく外交をおこなったが、この外交関係は中国の権威を利用したり、朝貢を通じた貿易(朝貢貿易)をおこなうなど周辺諸国の側に有利な面もあった。

以上のようなまとめを、その後の時代についても明・清時代を中心に話された。そしてヨーロッパ人の参入以降、特に十七世紀後半から十九世紀初頭の東アジア海域世界の動向を「進んだヨーロッパ、遅れたアジア」という偏見にとらわれずに整理し理解する必要があると力説された。

また日本史との関連で、日本や琉球との貿易と交流について、大阪大学の岡本弘道先生の補足を含めて詳しく話された。

更に東南アジア史の第一人者である桃木先生は、受講生に対して、センター試験から東大の二次試験まで、東南アジア史はどこまで理解しておけばよいかも提示された。また、昨年度の受験問題の出題文と模範解答の誤りについても指摘された。その一例としてT大学の問題を挙げる。

「東南アジアはその地理的条件から東西文明の結節点であり、古くから(イ)ヒンドゥー文化、仏教文化などがもたらされていた。

この地域の商業活動を主に担っていたのは、(1) 人商人、また東からやってきた(2) 商人である。さらに十三世紀にはイスラム教が受容され、(3) 商人も加わった。これに参入してきたのが西欧各国である。〈略〉 (マレー半島で)この(4)の採取には労働

力が大量に必要であることがわかると、当時この地域の宗主国は自らの他地域の植民地である(1)から多数の移民をこれに投入した〈略〉

問2(イ) こうした文化の遺跡には、長い間現地の住民の目に触れず埋もれていたが、近年発掘された高層建築遺跡がある。それだけの遺跡名をあげ、それぞれの位置を地図上の記号で答えなさい。」この問題に対しての指摘は次のとおり。

「全体に不正確な出題。
・ 東南アジアの商業活動が外来商人だけに担われたというのは、多くの教科書にそう書いてあるとはいえず、「植民地史観」。東南アジア各国の政府が中韓両国のようにうるさく文句を言わないからといってなめてはいけない。

・ また(2)の中国人が「東から」来たというのはヨーロッパ人の視点か？(3)について、南アジアへの海域へのムスリム商人の進出は唐代に遡り、東南アジア現地側のイスラム受容よりずっと早いことは教科書にも書いてある常識。

・ 十九〜二十世紀の東南アジアに投入されたインド人、中国人の労働力を「移民」と理解するのは不正確。移民もいるが、数年間の有期契約で渡航する「出稼ぎ労働力」の方が多数だった(その中で期限終了後に現地に定着する者もいたが)。特にゴム園のインド人労働者は出稼ぎ型の典型。

・ 問2のアンコールワットやボロブドゥールは「高層建築」だろうか？またボロブドゥールの「発見」は一八一四年、アンコールワットは一八六〇年代とされるが、地元民は一度も忘れていないし、大航海時代のヨーロッパ人の記録にも出てくる。いずれ

にしても「近年発掘された」はどういう年代感覚か。なおこれらは密林に埋もれていたが地面に埋まっていたわけではないので、「発掘」も問題」など。

二日目は、午前中に「陸から見た東アジア世界」を共通のテーマとする二つの模擬授業がおこなわれた。最初に神戸市外国語大学の佐藤貴保先生が、「中国と遊牧・狩猟民・隋唐世界帝国から征服王朝の出現まで」と題して話された。まず入試問題の「東アジアの農耕民と遊牧騎馬民族の対立の象徴であった万里の長城の歴史と、それが無用の長物であった時代とその理由について述べよ」を取り上げ、「中国史Ⅱ中国内地の農耕民史」の理解では解けない問題が多くなってきていることを指摘された。そして中国を含めた中央ユーラシアを理解するためには、風土の特色とそれに合わせた生活文化を持つ人々を理解する必要があるとして、ご自身が撮ってこられた写真を交えて説明された。

長城以北の主に乾燥冬寒地帯と華南の湿潤温暖地帯は明らかに生活と生産が違うが、長城と淮河の間の華北は農業も牧畜も出来る地域で、いわば中央ユーラシアと似通った風土である。だから農耕民、遊牧・牧畜民が混在していた。つまり長城は必ずしも風土の境に作られたのではなく政治的な建造物なのであると指摘された。そして農耕民と遊牧民の交流と対立の説明があり、その後中央ユーラシアから中国の内部に入っていく王朝を作った五胡や北朝、その流れを汲む隋・唐帝国の特色が説明された。これらは長城以南に拠点を移したが、その後出現した遼・金・西夏は本拠地を移さず、長城以南の農耕民に対しては征服王朝であった。これら中央ユーラシア側の勢力が中国本土を支配するとき、被征服者に征服者の言語・文化や

制度を一方的に押し付けることはせず、むしろ征服した土地の従来のやり方を継承・改良したり、外部から持ち込んでくることが多く、異文化への寛容さを持つていることが支配者の品格だったともいえるし、中国と周辺の文化を咀嚼しつつ独自の言語・文化を創り、発信したことは、同時代の東アジア各地に独自の文化を出現させた理由の一つになるのではないかと述べられ、その独自性を日本史用語の「国風」になぞられて表現した。また佐藤先生は日本でも数少ない西夏文字の研究者で、生徒に自分の名前や日付を西夏文字で書かせる作業もあり、生徒を喜ばせていた。

次に駒澤大学の杉山清彦先生が「中央ユーラシアから見た東アジア・モンゴル世界帝国から“中国”の創出まで」と題して、モンゴル世界帝国とモンゴル継承国家、清帝国とユーラシア、中央ユーラシアのたそがれと“中国”の創出、について話された。

モンゴル帝国と各ウルス（諸王領）は、「異民族による中国やイラン、ロシアなどの支配」ではなく、ユーラシア規模での広域支配の完成型として理解する必要がある。モンゴル人第一主義とは、ハーンを中心とする功績と恩顧の序列のことで、早く従った者、功績の大きい者を上位の序列にしたにすぎない。

モンゴル流の統治の仕方は省エネ型で、求めることは納税と服従のみで、特に問題がない限り従来の統治機構、人材、慣習に任せ、干渉しない。このモンゴル帝国が崩壊しても、異民族支配の終焉、その後の文明復興というのではなく、モンゴル色は消えていき各地域色に代わっていくが、明をも含むモンゴル国家継承の時代として理解できる。清は「最後の中国王朝」であると同時に「ユーラシアの帝国」でもあった。



清皇帝は、満州人にとってはハン、モンゴル人にとっては大ハーン、漢人にとっては中華皇帝、チベット人にとってはチベット仏教の大檀家、ムスリムにとっては保護者であった。それが近代において「中国」に収斂されていく構図を理解する必要がある。

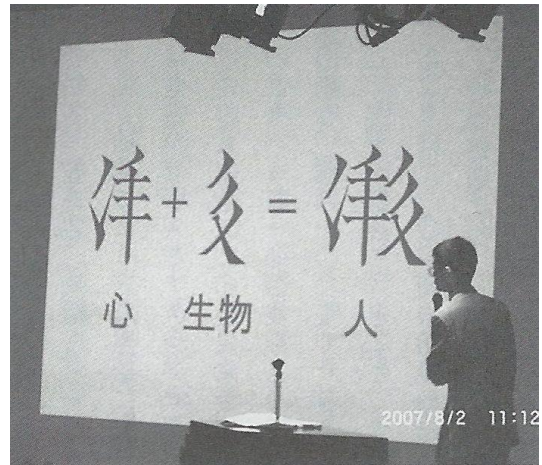
また近世ユーラシアの構図も、各地域の「落日の大帝国」としてバラバラに見るのではなく、モンゴル継承国家を受けた地域的世界帝国群として捉え、その上でそれぞれがおかれた条件と、その後の運命の分岐点を理解する必要がある。

そしてユーラシアの近代は、ヨーロッパとの軍事力の逆転と漢人

社会の人口爆発の中で中央アジアの「辺境化」が進んだこと、横の多民族・多言語・多宗教共存の「帝国」から、それらに不寛容な「国民国家」⇨孫文の中華民国も中国共産党も建前では「五族共和」を唱えてはいるが⇨が登壇したことであるとまとめられた。

午後の討論会は二日間とも多くの質問と意見が出て、盛会に終了した。

★西夏文字の偏と旁
（佐藤貴保氏）→



★午後の教員研修会
←（1日目）
の栄光学園図書館

